

査・考察を重ねて来ている。

(注二) 岩波講座『日本文学史』の日下力氏の「軍記物語の生成と展開」

(平成七年十一月)には、「結局、あれこれ勘案すれば、一二三〇年前後のせいぜい一〇年から二〇年末満の幅の間に、四作品は生成し、成立を見たと考えられる」とある。

(注三) 拙稿「愚管抄」の神、神社」(『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』第四十六号 平成六年一二月)。

(注四) 新日本古典文学大系43『保元物語 平治物語 承久記』(平成四年七月)の「保元物語」の「解説」(栃木孝惟氏執筆)にも「半井本は、そうした『保元物語』諸伝本のうち、完本としてはもともと古態をとどめるとされる本文である」とある。

(注五) 本稿の『平家物語』の引用で出典の注記のないものは延慶本『平家物語』のものである。

(注六) 延慶本を底本とし、右に長門本の、左に源平盛衰記の校異を小字で記した。

(注七) 僧籍にあつた範長も流されているが。

(注八) 師通の死の問題は、『願立』説話展開の再検討」(『語文研究』平成七年一二月)で扱っている。

(注九) 基通が落ち留まつたことも、『摂政殿落留給事』をめぐって」(『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』第二十七号 昭和五一年一二月)で扱っている。

(注一〇) 御橋惠言著作集一『保元物語注解』(昭和五五年一二月)の「法皇熊野御参詣并御説宣之事」の注解。

(注一一) 二神が併記された箇所を調べると、延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本は二つの呼称が混在している(当道系諸本のうち覚一本も)。

(注一二) 島原松平文庫本を底本とし、学習院大学図書館本の校異を本文の右に小字で記した。

(注一三) 頼朝と八幡大菩薩については、「源頼朝と八幡大菩薩——延慶本『平家物語』の一面——」(『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』第三十三号 昭和五七年一二月)や「頼朝の旗揚げをめぐって」(『人文』第十五号 平成三年八月)で取り上げている。

(注一四) 注一二に同じ。

(注一五) 延慶本を底本とし、長門本の校異を本文の右に小字で記した。

(注一六) 「承久記概説」(『歴史と國文學』昭和一五年五月)。

(注一七) 注四の「承久記 解説」(久保田淳氏執筆)も「嵯峨天皇の踐祚を知っている者の口吻を思わせる」と述べている。

(注一八) 『平家物語』の五本および慈光寺本『承久記』の八幡大菩薩が出て来る一連の逸話も神功皇后が中心になっているが、「仲哀神功應神の三尊」といった扱いは見出せない。

『管抄』の後二条関白の呪咀といった逸話で語られていて、やはりこの三作品が日吉社・山王については同じ宗教感覚の上にあることが窺われる。三作品の中でも、一類本『平治物語』と『平家物語』は、山門とその末寺・末社との関係など、話材に共通するところが多い。但し、この池禅尼の話も一類本『平治物語』の下巻に位置するので、この共通性も先述の密接な関係によるということになるうか。

半井本『保元物語』と延慶本『平家物語』には、平安京が八幡大菩薩・賀茂明神等の神々に守護された神聖な土地であることを述べたところがある。同様の記事は、『平家物語』の延慶本・長門本・源平盛衰記にある山門の奏状にも見られるのであるが、この奏状がこれらの記事の雛形となっただかどうかは詳らかではない。

慈光寺本『承久記』には光季が「八幡大菩薩賀茂春日」といった神々に向かつて、「スゴセル罪モナ」いので、宣旨に刃向つて「名ヲバ後代ニ留置ン」と決意する条がある。これは、『六代勝事記』に幕府方の武将が「八幡大菩薩なとかつみなきをみちひき給はさむ」と言つて発向する条があるので、これと同じ精神的基盤の上に立つものと考えられる。

熊野権現が人の死や社会の劇変を予言するということが、半井本『保元物語』と『平家物語』とに見られる。半井本『保元物語』の記事は『愚管抄』の作り変えであるが、『平家物語』でその死を予言される重盛についても、『愚管抄』の記事を虚構化したものがある。それは有名な殿下の乗り会い事件であるが、この虚構部に対して『愚管抄』は「コノフシギコノ

後ノチノ事トモノ始ニテアリケルニコソ」と評していた。従つて、『愚管抄』の作り変えを発端部に置くという手法も、半井本『保元物語』と『平家物語』では共通していると言えそうである。

右が神社・神祇毎に纏め直してみたものである。本文でも、右にも記せなかったことを二点付け加えて本稿を終えたい。

その一つは、本文部、慈光寺本『承久記』条で、土御門上皇に対して、「天照大神正八幡モイカニイタハシク見奉給ケン」と記しただけで終わっていることを厳しいと評して置いたが、これは、手法上は半井本『保元物語』の忠実の「春日大明神捨サセ給ハズハ ナド力憑ハ無ルベキ」という言葉に近いと考える。忠実の言葉も『保元物語』の中では単なる言葉の上だけの慰めに過ぎない。しかし、歴史の展開（師長に即して）を追えば、それが余韻を残した表現となつて見えて来るところもあると言えよう。

もう一つは、慈光寺本『承久記』の神社・神祇関係の記事についてであるが、ここには全く現世において人に利益を与えるといった内容のものがない。これは、慈光寺本『承久記』の、他の三つの軍記と最も異なる点に違いない。

（注二）全体を見渡したものに「『平家物語』諸本に描かれた中世の神社、神祇をめぐる」（『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』第四十五号 平成五年一二月）があるが、昭和五十五年に伊勢大神宮・天照大神を調べた頃から断続的に個々の神社・神祇に関わる調

とも、日吉山王は全く擁護することはなかったことになっている。日吉山王についてこのような例しか記さない『六代勝事記』は、『徒然草』に「山門のことをことゆゝしく書けり」と記された信濃前司行長の書いたとされる「平家物語」（『徒然草』の伝承上の）などと対照的な立場にあるのかも識れない。

最後の一箇所は、平家の都落ちを喜んだ後白河法皇が「叡感のあまりに嚴重の賞をくたすに 且は將軍に仰せられ且は執政に召とりて筑前の国宮崎の宮を宗廟に寄進せられぬ」というところである。このことは、『平家物語』を始めとする軍記にも『愚管抄』にも記されていない。

## ま と め と し て

本論部においては、各作品ごとに神社・神祇に関する記事を見て来たので、神社・神祇毎に纏めて、本稿の結びとしよう。

天照大神・伊勢大神宮と八幡大菩薩・正八幡宮とが結ばれて出て来るのがかなり目に付くが、その呼称に違いがある。伊勢大神宮・正八幡宮とするのが半井本『保元物語』、『平家物語』の四部合戦状本と延慶本に一箇所ずつ、天照大神・正八幡宮とするのが一類本『平治物語』と延慶本・四部合戦状本を含めて『平家物語』の大方の例（非当道系諸本と覚一本には、天照大神・伊勢大神宮両方の呼称の例がある）、慈光寺本『承久記』となっている。内容からは、皇位継承者の決定をこの二神の働きによるとするも

のが半井本『保元物語』や『平家物語』の屋代本・両足院本・八坂本・長門本に見え、二神が王法を守るという考えが半井本『保元物語』、一類本『平治物語』、『平家物語』諸本に見られる。

天照大神・伊勢大神宮が百王を守るという思想は、半井本『保元物語』と『平家物語』の殆んど諸本に見られる。

八幡大菩薩・（正）八幡宮の単独で出て来るものについてだが、一類本『平治物語』では、八幡大菩薩は全て頼朝に関わって記されている。頼朝と八幡大菩薩の結びつきは『平家物語』の非当道系諸本や真字本『曾我物語』に顕著である。一類本『平治物語』の該当する記事は、全て下巻にあるが、下巻は『平家物語』の描いて行く時代に重なっているので、両者は共通する伝承の上に生まれたのではないかと考えられる。

八幡大菩薩・（正）八幡宮でもう一つ興味深いのは、慈光寺本『承久記』、一類本『平治物語』で作品中の神社・神祇に占める八幡大菩薩・（正）八幡宮の比率が高いのであるが、両本の八幡大菩薩・（正）八幡宮の位置付け（性格）は大きく異なることである。

日吉社・山王では、半井本『保元物語』と一類本『平治物語』に後白河法皇が篤く頼みを懸けていたことが記されていて、『平家物語』もその線上にある。これに対して、『六代勝事記』は、後鳥羽上皇達が何の得ることもなく東坂元から戻って来たことを記していて、際立った対照をなしている。又、一類本『平治物語』には家盛が山王に崇られて死んだと語られているが、山王の霊験は半井本『保元物語』の将門降状や『平家物語』・『愚

スゴマセル罪モナキ者ヲ 宣旨ヲ蒙テ 命ハ君ニ召レヌ 名ヲバ後代ニ留置ン」と祈願するところである。「八幡大菩薩賀茂春日」を、「スゴセル罪モナキ者」の命を召す「十善ノ君」に対する神として捉えた例は、他の軍記物語にはない。「八幡大菩薩賀茂春日」は、光季のいる宮城の鎮守の神と光季の氏神ということであろうか。

最後の箇所は、「世ヲ治フ事四十二年 応神天皇ト申ス 今ノ八幡大菩薩ニテゾマシマシケル」という文である。このような八幡大菩薩の説明文は『愚管抄』と『平家物語』の延慶本・源平盛衰記・屋代本・覚一本・中院本・八坂本とにある（詳しくは次章で記す）。

### 『六代勝事記』

『六代勝事記』に記された神社・神祇関係の記事も僅かに五箇所だけである。又、そこに記された神社・神祇の数も四つに過ぎない。このような点は、前記の慈光寺本『承久記』に近いと言えよう。

『六代勝事記』には、石清水・八幡大菩薩が一回ずつ出て来る。石清水は、平家都落ちの直後に、「于時法皇の仙駕を天台山にもよほし 静謐を石清水にいのり給ひき」と記されているところである。天台山と石清水が対になっていることから、これは『平家物語』の延慶本・長門本に記されている九月十五日の八幡の放生会のことを言っているのではないかと思われる。しかし、そこで、延慶本・長門本も含めて多くの『平家物語』諸本

が中心にして記しているのは、伊勢大神宮へ公卿の勅使を立てられたことであつた。

八幡大菩薩が出て来るのは、幕府方の武将が「かるき命をおもき恩にかへむ事ふた心なし 八幡大菩薩なとかつみなきをみちひき給はさらむ あか月むちをあくへし」と北条政子に答えるところである。「つみなき」という言葉と共に挙げられている点は、前記慈光寺本『承久記』の光季の祈りに一致する。

猶、八幡については「彼仲哀神功應神の三尊の金言を秘してひそかに玉鉢をあらはす 神魂を八幡の宗廟にのこして正真を四海の王家にまもる」という文章もある。八幡大菩薩について、『愚管抄』、『平家物語』の延慶本・屋代本・覚一本・中院本・八坂本、慈光寺本『承久記』は応神天皇だけを挙げているが、『六代勝事記』は寧ろ神功皇后を中心に行っているところに特色がある。<sup>(注一八)</sup>これは北条政子を称えることと深い関係があり、政子に神功皇后を重ねている点もありそうである。

日吉社・山王も一回ずつ出て来る。日吉社は、平家一門の山門への願書に「藤氏の春日社を氏神とし興福寺を氏寺とせるかことくに 平家の日吉社を氏神とし延暦寺を氏寺として」とあるところである。この願書は『平家物語』諸本（欠巻を除く）に記されている。

山王は、この日吉社に願書を出すところ（「なくく山王に祇請して」と、後鳥羽上皇達が東坂元から都に戻るところ（山王佛法をまもる御はかりにや 十日はみやこへかへり住せ給ぬ」）の二箇所に出ている。両所

物語』にも関係する記事を見出せない。

熊野路から引き返した清盛一行は、「稻荷社にまいりて 各 杉の技を折 介の袖にかざして」六波羅に着いたという。稻荷の神木が杉であることは、延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』の康頼達の熊野詣で（切目王子）に見える。

前記の源五盛康が京で見た「不思議の霊夢の告」を頼朝に語るのは、建部社である。頼朝は「<sup>身</sup>行すゑいのり申さんために」社頭に通夜したという。一類本『平治物語』では、頼朝と源五盛康、建部社が深く関連しているように見えるが、『愚管抄』『平家物語』には建部社の記述はない。

鞍馬寺に預けられた沙那王（義経）は、夜毎に貴布禰社に参詣したというが、参詣の理由は特に記されていない。『平家物語』の延慶本・長門本では、木曾義仲を討った後、義経が鞍馬寺や貴布禰社を訪ねて、「社殿昔ニカワリタル事ハナケレドモ 古ミシ草木トモハルカニ生シケリテ 神サヒタルアリサマ」<sup>（注一五）</sup>を見、神主から「夢想ノ告」とのことで「白羽ノカフラ矢」を貰っている。この辺り一類本『平治物語』と延慶本『平家物語』が相似た義経伝に取材していることは確かだろう。

頼朝は配流の途上、熱田社に立ち寄っている。彼はここで、父義朝のことを思い遣り、内海庄司への復讐を誓ったというが、このようなことは勿論『平治物語』にしか記されていない。『平家物語』には、京の形勢を範頼、義経が熱田で窺っていたことや、弟子となった六代を伴った文覚が上洛の途上逗留したこと（延慶本『平家物語』には鎌倉に護送される宗盛も）

が記されている。要衝の地であったこと以上は感じ取れず、頼朝縁の地という味わいは殆んど無い。

#### 慈光寺本『承久記』

慈光寺本『承久記』は、後藤丹治氏によつて「最も原本に近いもの」と見做されて以来、<sup>（注一六）</sup>『承久記』の古態本というのが定説になっている。

慈光寺本『承久記』には、神社・神祇関係の記事は僅か三箇所しかない。これは半井本『保元物語』に比べても格段に少なく、『将門記』などの初期軍記を思わせる。又、そこに出て来る神々も、全て八幡大菩薩が関わっているという特徴がある。次に、その全ての箇所を目を通して行こう。

最初に取り上げるのは、天照大神・正八幡と並記されるものである。中院（土御門院）が土佐國へ配流された記事の最後に、「此君ノ御末ノ様見奉ルニ 天照大神正八幡モイカニイタハシク見奉給ケン」とある。この記事の特徴は、天照大神・正八幡宮の同情がただそれだけで、中院の上に二神の加護が及ぶこともなく作品世界が終わることである。半井本『保元物語』などの例からすれば、後嵯峨天皇が即位したことが意識にあつてかと思<sup>（注一七）</sup>られるのだが、しかし、そのような春の訪れに全く言及しないで終わるというのは、厳しい雰囲気を感じさせる。

二つ目は、伊賀判官光季が自害するに当たつて、「南無帰命頂礼 八幡大菩薩賀茂春日 哀ミ納受ヲ垂給ヘ 光季 都二留テ 十善ノ君ノ御為ニ

ノ侍夢見ル事」では八幡大菩薩が清盛に預けていた節刀を召し返して、頼朝に与える。『平治物語』の頼朝の弓矢と六十六本の熨斗鮑を合わせたものが、『平家物語』の節刀ということになるのか（猶、源平盛衰記は、「下野守源義朝二被預置御劍 イサ、カ朝家二背ク心アリシカバ召返シテ清盛法師二被預給タレ共」と、義朝から始めている）。八幡大菩薩が出て来る最後の一箇所は、配流の途上、熱田宮に着いた頼朝が、父の討たれた野間の内海の方角を聞いて、「南無八幡大菩薩 頼朝を今一度 世にあらせましませ 忠宗景宗を手にかけて 亡父の草陰に見せまいらせ候はん」と祈誓するところである。忠宗・景宗に対する復讐は『平治物語』での課題であり、このような内容は『平家物語』等には出て来ない。しかし、これも殺された家族の復讐を誓うと一般化すれば、『平家物語』の延慶本・源平盛衰記・源平闘諍録や真字本『曾我物語』に相当する記事のある「南无帰命頂礼八幡大菩薩 義家朝臣力由緒ヲ不捨者征夷ノ將軍二至テ朝家ヲ護リ神祇ヲ崇メ奉ヘシ 基運不ハ至ラ坂東八ヶ國ノ押領使ト成ヘシ 其レ猶不可叶者伊豆一國力主トシテ助親法師ヲ召取テ其怨ヲ報ヒ侍ラム」が、この記事に近いのではなからうか。延慶本等では運を三つ程の段階に分けて、その生き続ける為の最低の運に、娘千鶴の仇である「助親法師ヲ召取テ其怨ヲ報」いることが記されているのである。<sup>(注一三)</sup> 家族の仇を報いようと誓う頼朝を描く点で、一類本『平治物語』とこれらとは通じるところがあると言えよう。

日吉社・山王が一回ずつ出て来る。日吉社は、後白河法皇が一人で一品

御書所から仁和寺へ脱出する途中祈願したとのことで、乱後、その報賽の為に参詣したらしい旨が記されている。『百鍊抄』によれば、それは譲位後の神社参詣の最初に当たるものであった。『平家物語』には、法皇が譲位後最初に日吉神社に参詣したことや、日吉山王に深く帰依していることが記されているが、日吉山王信仰と平治の乱に触れたものはない。猶、法皇は上西門の前で北野社も遙拝しているが、北野社については、それ以上のことは何も記されていない。山王が出て来るのは、祇園社の事件で、山門に訴えられた清盛の裁許がないのは家盛の為だとして呪咀され、「山王の御崇」で家盛が若死にした、と池禅尼が頼朝に語るところである。山門に呪咀されて死んだ例としては、『愚管抄』や『平家物語』に記されている後二条関白師通の逸話がある。又、末寺への狼藉から本山の山門の訴訟沙汰に発展した例としては、『平家物語』の描く白山事件がある。『平治物語』の「山王の御崇」という話材は『平家物語』と共通する面が大きい。猶、祇園社と山門の本末の關係が『平治物語』には明記されているが、『平家物語』の安元三（一一七七）年の御輿振り事件でも七社の御輿が祇園社に入れられて居り、両社の近い關係が示されている。

熊野参詣が七回記されている。しかし、その中六回は、清盛の熊野参詣（京を留守にした間に平治の乱が勃発し、彼は途中から帰京した）に關係するものである。清盛の熊野参詣の途上で平治の乱が勃発したことは、『愚管抄』や延慶本『平家物語』に見える。残りの一箇所は、佐藤兄弟の母が「十三の時 熊野へ参し」というものだが、これは『愚管抄』にも『平家

## 一類本『平治物語』

陽明文庫本・学習院大学附属図書館本・島原松平文庫本の『平治物語』も古典文学大系『保元物語・平治物語』の永積安明氏の解説で、これらの三本から想定される本を古態本とする見方がほぼ定着して以来、文保・半井本『保元物語』と同様に古態を探る有力な本文とされて来た。これら所謂一類本『平治物語』に記されている神社・神祇関係の記事は全部で二十三箇所である。

天照大神が一箇所あるが、これは正八幡宮と併記されているものである。半井本『保元物語』では伊勢大神宮という呼称であったが、天照大神という呼称を取っている点は『平家物語』の当道系諸本の方と一致している。<sup>(注二)</sup>さて、その場面であるが、それは左衛門督光頼が、天皇を黒戸の御所に押し籠めて、右衛門督信頼が朝餉の間を使用していることについて、「人臣の王位をうはふ事 かんてうにはそのれいありといへとも 本朝にはいまた如此のせんきをきかす 天照大神正八幡宮は王法をはなにとまほらせ給そや」と嘆くところである。ここは、一院に対してとなっていたり、外に「君ノ取分テ侍マヒラセ給フ日吉山王七社」が加えられたりしているが、前述の『平家物語』の静憲法印が後白河法皇を慰める場面（での挙げ方）に近からう。信頼に対する光頼の態度と、清盛に対する静憲の態度にも相に近い面がありはしないだろうか。

次に、半井本『保元物語』と同様に、「正八幡宮」の外に「八幡大菩

薩」という呼称が出て来る。これは六箇所あるが、全て頼朝に関するものである。このような使われ方も『愚管抄』や半井本『保元物語』にはない。六箇所の中三箇所は「千人の中の一人と御身みみのたすからせ給はたゝことにては 候はし 氏神うちをかし八幡大菩薩の御はからいに こそ候らめ」という言葉のように、頼朝の助命を八幡大菩薩の冥助とするものである。猶、この三回の中の二回は頼朝自身の心内語、もう一回は頼朝源五盛康が頼朝に語るもの（引用文）である。頼朝の強運を嘆称する姿勢は、延慶本『平家物語』の「右大将頼朝果報目出事」という章段名にも窺われるが、『平家物語』などでは助命されたことは「果報目出事」の出発点に過ぎず、『平治物語』にしか助命を重視した前記のような記事はない。

二箇所は、盛康が頼朝に、頼朝が天下を握るといふ八幡大菩薩の霊夢を得たと、その夢を、具体的に解説しながら語るところである。これは、前記延慶本『平家物語』「右大将頼朝果報目出事」の「此大将十二ニテ母ニフクレ 十三ニテ父ニハナレテ 伊豆國蛭力嶋へ被流給シ時ハ カクイミシク果報目出カルヘキ人トハ誰力ハ思ヒシ」という文と矛盾するが、頼朝が天下を手にするというのは『平家物語』の描く世界である。盛康が頼朝に霊夢を語るといふ記事はさすがに『平家物語』には無いが、霊夢の内容に注目すれば、類似性を指摘出来る逸話がある。その霊夢の内容で注目すべきところは、八幡大菩薩が、義朝の弓矢を頼朝に与える為に天童に預け置き、一方、六十六本の熨斗鮑を頼朝に食させることである。これは、『平家物語』諸本にある「雅頼卿ノ侍夢見ル事」に通じると考える。「雅頼卿

人の兄弟のうち、右大将兼長・左中将隆長はそのまま配所で没している。<sup>(注七)</sup>

しかし、頼長の三人の公達の中で中心になって描かれているのは中納言中将師長である。この師長は、長寛二(一一六四)年に赦されて帰洛し、『平家物語』ではこの師長が左大将を辞するのが契機になって、所謂鹿谷の事件が始まるのである。従つて、師長に即すれば、『平家物語』は半井本『保元物語』の後日談的風貌を有っている。但し、師長が内大臣左大将となつていた時点においては忠実の言葉、「春日大明神捨サセ給ハズハ」が思い起こされ、春日大明神の冥助といったことも考えられたりするのであるが、『平家物語』の世界では再び流罪に処せられるので、冥助も全く浮かんで来ない。猶、『平家物語』で、藤氏貴族の生死や貴族生命と春日大明神といった視点で纏められているものに、前者生死として後二条師通の死に様を見て、父師実が春日大明神の加護を嘆き、訴えるところ(四部合戦状本・長門本・源平盛衰記にある)、<sup>(注八)</sup>後者貴族生命として普賢寺殿基通が春日大明神の御告げで平家一門の都落ちに同行せず、摂政として引き続きつとめることになるところが挙げられるかと思う。それにしても、半井本『保元物語』の場合は頼長とその公達という家族に限られているので、相当に禁欲的だという印象を受ける(『平家物語』の延慶本・長門本・源平盛衰記では、新大納言成親や左少弁行隆の条にも春日社・春日大明神が出て来る)。

最後に、熊野権現について次のような逸話が記されている。

久寿二(一一五五)年、鳥羽法皇が熊野に参詣して、証誠殿の御前に通夜していると、左の手を三度打ち返す夢想の告げがあった。法皇が

「イワカノ板」という巫女に権現を降りさせて、お告げの内容を問うと、翌年法皇は崩御して、その後、天下が覆るということであった。

果たして、法皇は翌年七月崩御された。その後、保元の乱が勃発する。

この逸話については、早く御橋惠言が『愚管抄』<sup>(注九)</sup>巻第四の白河上皇の逸話を「附會せるもの」と見做していた。『平家物語』には多くの熊野関係

の記事があるが、証誠殿で夢想の告げを得て、それを巫女に問うものはない。構図のやや似たものに、清盛が熊野参詣の途上、白魚が飛び込んで来たので、その意味を先達に尋ねたということがある。但し、この逸話は、

四部合戦状本・源平盛衰記・南都本・屋代本・八坂本にはない。「明年必ズ崩御アルベシ 其後ハ 世ノ中手ノウラヲカヘスガ如クナランズルゾ」

という託宣は、人の死とその関係する社会の劇変を告げているが、これは重盛の二者択一の祈願の中、「榮耀一期ヲ限テ 後昆ノ恥ニ及ヘクハ 重盛力今生ノ運命ヲ縮テ 来世ノ苦輪ヲ助給ヘ」の方を納受して、重盛の死を知らせる、その予表に結果的に一致してしまうのではなからうか。とすれば『平治物語』の鳥羽法皇への予言と『平家物語』の重盛への予表は極めて近い面を有っていることになる。『平家物語』は、それを清盛の「悪心」に悩む重盛の祈願に結び付けて、面目を一新させたと評して宣かろうか。猶、『愚管抄』の逸話の改変の例としても、資盛と基房の乗り合い事件の報復者を重盛から清盛に改めているということがある。このように分析して行けば、『平家物語』の重盛に関する逸話には、一、二、半井本『保元物語』に通じる面が浮かんでくるのである。

元物語』では「住吉 春日 広瀬 竜田」、延慶本『平家物語』では「吉田宮」「小原野」「忠須宮」が相違している。この、半井本『保元物語』の四社は京城外のものであり、延慶本『平家物語』の三社は神祇名でなく、社殿名で挙げられたものである。従つて、京城の神祇名で挙げられた八社（神明）は共通しているのである。このように半井本『保元物語』の平安京を神明が守護しているという箇所は、延慶本『平家物語』の平安京の目出度さを述べた条に共通する面が多いのである。又、『平家物語』には、延慶本の「都遷事」の外、延慶本・長門本・源平盛衰記にある山門の都返りを要求した奏状にも、「賀茂 八幡<sup>比叡</sup> 春日<sup>比叡</sup> 平野 大原野 松尾 稻荷 祇園<sup>（注六）</sup> 北野」と神社を列挙した部分がある。山門の奏状なので、文献としてはずっと古い筈であるが、原文の引用と認めて宜いのか不明であり、又、右の部分から「鞍馬 清水 廣隆 仁和寺」と続くので、神祇信仰の純度も異なると言うべきだろう。只、列挙された神社は、全て「都遷事」の引用部に含まれてい、この二つの記事には一貫した把握が認められる。次に、鬼門に鎮座している日吉山王については、保元の合戦の勝利を後白河天皇に齎したという、次のような記事もある。

抑 今度合戦破ヌル事 王事不危 忝ク神明ノ御計ト覺タリ 公家殊御祈念深テ 日吉社二真筆御願書ヲ 七条ノ座主ノ宮へ奉リ給ケレバ 座主御願書ヲ神殿二籠テ 肝胆ヲ碎キ祈請シ申サセ給ケル驗ニヤ 為義 忠正ガ子共 命ヲ惜共見ヘザリケレ共 山王ノ御計ニヤ 無程敵ヲタイラゲラレシ事 法驗モ目出ク王威モ威シ

本文は、この後、更に将門降伏に続いて行く。日吉社に後白河天皇が願書を奉つて、天台座主に所請させたので保元の合戦に勝ったという記事は、『愚管抄』にも『平家物語』諸本にもない。但し、将門降伏の為に尊意が修法して験があつたことは、延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・源平盛衰記』に簡単な言及がある。

春日大明神は、悪左府頼長が「氏長者二至ナガラ 神事仏事疎ニシテ聖意二叶ハ」なかつたので、守護しなかつたという箇所と、頼長の公達三人が祖父忠実に出家の意向を伝えた時、忠実が「春日大明神捨サセ給ハズハ ナド力憑ハ無ルベキ」と言つて、それを慰留した箇所との二回出て来る。いずれも摂関家の人に関わるかたちで記されている。頼長が藤原氏の長者の地位にいながら矢に中たつて死んだということは、氏神信仰との関わりでも大事件であつた。『愚管抄』には、藤原氏の守護神という役割で春日大明神が登場する場面はない。しかし、『六代勝事記』が記載する平家一門の比叡山延暦寺への連署に「藤氏の春日社を氏神とし 興福寺を氏寺とせるかこと」とあるように、守護神という見方は早くから一般化していた筈である。半井本『保元物語』の前者、「氏長者二至ナガラ 神事仏事疎」であつたという春日大明神の託宣は、作品中の頼長の言動に該当するものを見付け出すことは出来ない。後者、忠実の「春日大明神捨サセ給ハズハ」という言葉は、半井本『保元物語』の中では出家を制する言葉として使われているに過ぎず、春日大明神の加護が公達に与えられるかどうかは、特に問題になつていないと言えよう。実際、遠流に処せられた三

物語』のように伊勢大神宮の誓いと明記して記されている箇所はない。『平家物語』では、「内侍所由来事」の天徳四（九六〇）年の内裏焼亡の時に、小野宮実頼が「昔天照大神百皇ヲ守ラント云御誓有ケリ」<sup>（注五）</sup>と内侍所に呼びかけたという逸話がある（中院本・八坂本は主語を欠く）。当道系諸本では百王を守護するのは天照大神（伊勢大神宮）に限定される様だが、『平家物語』の延慶本と南都本では「八幡大菩薩百王鎮護ノ御誓不淺」と、八幡大菩薩にも百王を守護する誓いが認められている。

次は正八幡宮と共に記される場合である。最初に挙げるのは、徳大寺実能が崇徳院の意向を左京大夫教長に打ち明けられて、「サスガ天子ノ御運ハ凡夫ノ兎角思ニヨルベカラズ 伊勢太神宮正八幡宮ノ御計也」と答えるところである。このように二神が並記される例も『愚管抄』にはあるが、半井本の右の箇所のような皇位継承に関するものはない。『平家物語』では屋代本・両足院本・八坂本・長門本に「帝王位ニ付セ給事 凡夫ノ兎角不依思」<sup>二</sup>天照太神正八幡宮ノ御計ヒトソ覚ヘタル」（屋代本）のような文がある。もう一箇所は、「相伝ノ主」に弓を引くのかと詰る八郎為朝に対して、鎌田次郎正清が「此矢ハ正清ガ射矢ニ非ズ 伊勢大神宮正八幡宮ノ御矢也」と言つて、矢を放つところである。謀反人・反逆者に向かつて二神の名が挙げられているのであるが、『愚管抄』で頼経將軍に対して、「ソレヲフセギヲボシメシテハ 君コソ太神宮八幡ノ御心ニハタガハセヲハシマサンズレ コノヲ構テ君ノサトラセタマウベキ也 コノ藤氏ノ攝録ノ人ノ君ノタメ謀反ノカタノ心ヅカイハ ケヅリハテアルマジトサダメラ

レタルナリ」と説いている条のものは、「謀反」という表現が後に出て来るので、類する面を含むと言えようか。『平家物語』でも同一の例とは言えないが、治承三（一一七九）年十一月に清盛の為に鳥羽殿に幽閉された後白河上皇を慰問した静憲法印が「天照大神正八幡宮」などを挙げて励ます場面がある（両足院本にはない。又、四部合戦状本・長門本・源平盛衰記は伊勢大神宮とする）。

右に伊勢大神宮と併記されていた正八幡宮に関するものに、八幡大菩薩として記されるものがある。

南二八八幡大菩薩 男山二跡ヲ垂給フ 北二八加茂ノ大明神 鳳城ヲ守リ給フ 鬼門ノ方ニ当テハ 日吉山王御座ス 大内山近ク 天満天神頭シ給フ 其外 松尾 平野 稻荷 祇園 住吉 春日 広瀬 竜田ノ社マデ 遠近ニ豊ヲ並ベ 日夜ニ結番シテ 禁闕ヲ守リ給フ

これは平安京が神明に守護されていることに、左大将公教を始めとする鳥羽上皇の旧臣達が頼みをかける条である。『愚管抄』にはこのような王城守護の例はない。『平家物語』では、延慶本『平家物語』の「都遷事」に、「東方ハ吉田宮 祇園天王 巽方 稻荷明神 南方 八幡大菩薩 坤方 松尾明神 西方 小原野 乾方 北野天神 平野明神 北方 賀茂明神 艮方 忠須宮 日吉山王御坐ス」という記事がある。半井本『保元物語』が南北から始まりながら、「鬼門ノ方」「大内山近ク」と順序を乱して「其外」の羅列に流れて行くのに対して、延慶本『平家物語』は東から時計回りに整理して挙げて行っている。挙げられている神社名は、半井本『保

# 半井本『保元物語』・一類本『平治物語』・ 慈光寺本『承久記』に記された神社・神祇 をめぐって

橋 口 晋 作

筆者は、これまで断続的に『平家物語』諸本に記された神社・神祇について考察して来たが、<sup>(注一)</sup>『保元物語』・『平治物語』・『承久記』の古熊本に記された神社・神祇は、『平家物語』を加えた中世前期軍記の間で、互いにどの程度に似、異なるのであろうか。又、それは、この四軍記と関わりの深い『愚管抄』・『六代勝事記』のものとはどうなのであろうか。筆者は、このような関心から、本稿において、先ず半井本『保元物語』、一類本『平治物語』、慈光寺本『承久記』、『六代勝事記』について、それぞれの作品に記されている神社・神祇関係の記事が、他の作品の同一神社・神祇関係の記事とどの程度に似、異なるかを考察する。そして、それを、更に各神社・神祇毎に（特徴的な面を）眺め直してみよう。本稿の調査・考察によつて、前期四軍記の思想的な立場の異同や、各逸話又は虚構化の手法の類似などがいくらかでも明らかになれば、それは、これら四軍記の成立論議に一石を投じることにならないであらうか。筆者の本稿の試みは、近年強く意識され出した、四軍記の成立時期の近さを視野に入れてのものなのである。<sup>(注二)</sup>

『平家物語』や『愚管抄』が章立てされていないのは、筆者としては既に本稿のような考察を、この二作品については済ましていることによる。<sup>(注三)</sup>猶、本稿で比較・考察の対象にした『平家物語』の諸本は、延慶本・長門本・源平盛衰記・源平闘諍録・四都合戦状本・屋代本・覚一本・中院本・両足院本・八坂本である。又、以上の作品の外、部分的に真字本『曾我物語』を参考に行っている箇所もある。

## 半井本『保元物語』

半井本『保元物語』は、昭和三十六年七月に刊行された岩波書店の古典文学大系『保元物語・平治物語』に付された永積安明氏の解説で、文保・半井本系統の第一類本が『保元物語』の古熊本であらうとする見方がほぼ定着して以来、この系統の完本として古態を探る場合の有力な本文とされて来た。<sup>(注四)</sup>本稿で半井本を取り上げたのもこのことによる。

半井本に記されている神社・神祇関係の記事は全部でも十一箇所である。その全てについて以下見ていくことにする。

伊勢大神宮が三箇所に出て来る。一箇所は単独で、残り二箇所は正八幡宮と共に記されている。単独で記されているのは「伊勢大神宮八百王ヲ護ラントコソ御誓アリケレ」というところである。この所謂百王思想は、慈円の『愚管抄』にも「神ノ御代ハシラズ 人代トナリテ神武天皇ノ御後百王トキコユル」などと出ている。但し、『愚管抄』には、半井本『保元